
悲痛なテレパシー

安堂仔一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悲痛なテレパシー

【NNコード】

N4502X

【作者名】

安堂仔一

【あらすじ】

ある日、主人公「僕」の元に謎の来客「タキシード男」が現れる。彼は「僕」を誘拐すると、そのまま異国とのある屋敷に連れ出した。その屋敷内で「僕」が見たものは、人工的装置によって生かされた植物状態の「お嬢様」の姿だった。彼女は「僕」に以前テレパシーで助けを求めており、彼も彼女を助けようと試行錯誤を繰り返す。・摩訶不思議恋愛空想劇。作者煩悩につき、更新は遅いですが、長い目で見守つてやってください。

心の奥から声が聞こえる。

「助けて・・・」

女の子の声だ。

「誰?」

その声に僕は答える。

けれども、返事はない。

テレパシー? そんなものあるのだろうか。けれども、その声は確かに聞こえる。

「助けて・・・」と。

いつたい誰が、なぜ僕に助けを求めているのか。そうして、それがなぜ僕の心の中に届けられたのか。

・・・わからないよ。君のことが。

明くる日の朝、僕は学校へと向かった。なんてことはない。僕はただの田舎の中学生だ。毎朝起き、学校に行く。家から学校までは歩いて30分ほど。少し遠いのがネックだ。それでもって、学校の規則が厳しくて、自転車通学などは許されていない。なんとも理不尽なものだな、と毎朝通学しながら思つのだつた。

教室に入り、何気なく友人たちと話したりする。そんでもって授業が始まり、それをまじめに受ける。代わり映えのしない日常。それこそが、僕の中学校生活のタイトルともいえそうだつた。

友達が少ないわけでも、いじめられているわけでもない。けれども、友人たちとはあまり深入りしないようにしていた。部活動に入つて

いない僕は、放課後になれば、そそくさと家に帰る男だ。もつずつと、そうした生活を送っている。

家に帰つても誰も待つてゐるわけでもない。うちは両親が共働きだから、平日でも夕方まで家にいないことが多い。姉弟として、大学生の姉がいるけれど、何となくいつも忙しそうにしており、やはり家にはいないことの方が多い。

そんなこんなで、学校が終われば、僕はひとりぼっちなのであつた。これを僕は、「自由タイム」と呼んでいる。

さて、今日はどうじょうつか。昨日読んでいた本の続きでも読むか・。

そうしてリビングでしばらく本を読んでいると、来客がきたことを知らせる鐘が鳴つた。誰だらう。僕は玄関へと向かつ。

玄関を開けると、そこには黒いタキシードを着た男性が一人で立つていた。

「ど、どう様でしょうか

「・・・来ればわかります」

そうじつて、男は家の前に止めてある黒塗りの車を指さした。

「・・・な、なにを言つてゐるんですか

「・・・車に乗れ、と言つてゐるんですよ。わかりませんか？」

そう言つて、男は僕にピストルを向けた。そもそも、殺すぞ、といつ眼差しで。

気がつけば、僕は男の車に乗り、どこか遠くへと連れられているのだった。手には、手錠をかけられている。

「いったい、どこへ連れていくつもりなんだー」と僕が問いかけても、

「・・・着けばわかるでしょう」としか男は答えない。

からうじてわかることは、この車が高速道路をひた走っていることと、僕がこの男に誘拐されてしまったことだった。

「着きましたよ

車が止まつたのは、それからかなりの時間が経つてからだった。

「い、いは・・・?

「・・・わかりませんか。日本海ですよ。」

に、日本海・・・あれに見えるは、日本海だというのか。もう夜遅いので、暗くてよく見えないが、どうやら港かなにかに着いたようだ・・。

「あなたには、これから船に乗つてもうります。そつして、ある人のもとへと向かうのです。これは命令です。」

そういうつて今度は男は近くにある船を指さした。銃口を僕に向けな

がら。

「・・・くつ」

そうして、僕はそんなに大きくはない船に乗せられ、大海原へと旅立つのだつた。

翌朝、目が覚めると、僕は船の上だつた。

「い、いには・・?」

「どうやら、どこかの島か何かに着いたらしい。船はすでに停泊していた。」

「おや、起きましたか。」

僕を誘拐した男が現れた。

「い、いはどこだ?」

「ふふ・・・少なくともあなたの国ではありますよ。」

「な!」

「これからあなたはこの国でくらしてもらいます。これは命令です。」

あいかわらず、銃が僕に向けられている。

「・・・日本に返してくれ」

「ダメです。あなたを必要としている人がいるので。」

「な、なぜ僕なんだ！そいつのために僕を誘拐したってのか！」

「ええ、そうです。」

「くつ・・。」「、日本に返せよ。今すぐ」「。」

「・・・死体になつて、帰りますか？」

そう言つて、男は銃口を僕の額に当てた。

「・・・勘弁してください」

「ふふ、いい子です」

それから、僕は船から降ろされ、男の後をついていった。しばらく歩いた後、目の前には豪邸といえる建物が。

「着きましたよ」

「えつ」

「あなたには、これからひじりで暮らしてもいいです」

そうして僕は・・、その豪邸の中へと誘われた。そこに入る前に、男に「逃げ道を覚えられては困りますので」という理由から、田隠しをされた。

男に引つ張られるようにして、建物の中を移動する。いくつか部屋や階段を経たのち、男が「ここです」と言い、扉を開けた。そして、その中で、田嶋と手錠を外された。

そこで僕が見たものは・・

人工呼吸器やら何やらをつけベッドに寝かされた女の子の姿だった。

「な、い、れは」

「・・・植物状態となつた、女の子、いえ、お嬢様です。」

聞けば、この女の子は事故で脳に障害が残り、植物状態になつているといふ。

「その子と、僕の誘拐とで何の関係があるっていうんだ！」

「ありますとも。気づきませんか？」

「な、なにを言つて・・・」

「（助けて）」

えつ・・・

今、また心のなかで声が・・・

「（助けて）」

ふと、女の子を見た。も、もしかして。

「おわかりになられましたか。そのお嬢様があなたにテレパシーで助けを求めているのです。特別な装置によつて、私はそれを突きとめた。そして、あなたをここに連れてきた、というわけです。」

「な、なんだつて・・・」

「なぜお嬢様があなたに助けを求めているのか、それは私にもわからぬ。ですが、お嬢様があなたに助けを求めているといふのは、事実なのです。だから、あなたにはここに居てもらいます。そして、お嬢様をどうか、お助けください・・・」

男はそう言つと、僕に頭を下げた。

「・・・わかつた。けれど、条件がある。彼女が助かつたら、僕を日本に返してくれ。」

「・・・そうですねえ。検討します」

そんなこんなで、僕は違う国のどこかの屋敷に連れ去られ、僕に助

けを求めている植物状態の女の子と一緒に暮らすことになったのだ。

見慣れぬ屋敷。目の前には、人工的な装置によつて生かされている少女。

「助けて……か」

彼女はなぜ、僕を選び、そして、僕にテレパシーで助けを求めてくるのだろう。それを聞いてみたい……が……どうすればいいのやら。

「ぐきゅ るむる」

……腹減った。考えてみれば、昨日の昼からなにも食べていない。タキシード野郎は僕にここに居ろというが、僕の食事とか面倒を見てくれるのだろうか……。とりあえず、この部屋の外に出て聞いてみるか……。

だがしかし、扉を開けて外に出ようとするも、外から鍵がかかっており、こちらからは開けられそうになかった。

「こりゃあ、ダメだな」

おとなしく、外から人が来るのを待つしかないのか……。

しばらくして、扉をノックする音があった。扉が開いて、メイド？
が食事を運んできた。

「さすがに死なれると困りますので・・・」と言つて、部屋の小さなテーブルの上に食事を置いてくれた。

「彼女の分の食事は？」

「ああ、お嬢様でしたら、お構いなく」

何でも、食事も食べられない体であるらしい。考えてみれば、それはそうか・・・。

食事を終え、メイド（どうやら本当にメイドらしい）がそれを片づけると、また扉は閉められた。食事の時に逃げるといふのも・・・。できなくはないのか・・・？

いや、だがあのタキシード男のことだ、きっと外で銃を握りしめて僕を待ち伏せしていることだろう・・・。部活動もろくにやっていなかつた僕にとって、体を張った仕事というのは、どうにも手に着かないのは明らかだ・・・。逃亡はあきらめよ。

そこからは、僕と少女、ふたりきりの時間が続いた。だが、あれからというものの少女からのテレパシーはなく、沈黙が続いている。

「せめて、僕にもテレパシーが使えればなあ

「お困りですか？」

「わっ！び、びっくりした・・・」

タキシード男め、いつの間に僕の背後に・・・。やはりここは出来

る男のようだ・・悪い意味で。

「ふふふ。お困りかと思つて、」『なんものを用意しました』

と言つて、僕に何かを渡す。

「テレパシー養成キット・・・」

「はい、左様で。お嬢様と交信したければ、それを使って見てください」

「ちょっと、待て。なんで僕にやらせるんだーほかにテレパシー出来る奴とかいないのか? そいつを介してもらえば、樂じやないか」

「くくく・・・、お嬢様があなたに助けを求めているのを、忘れたのですか。あなたが交信して助けなければ、意味がないでしょ。お嬢様がそれを求める以上、私どもには、たとえテレパシーが使えたとしても、あなたをお助けすることはできませんよ」

「ぐぬぬ・・・。ううか。なら仕方ない。これ、ありがとう」

「いえいえ、せいぜい! 精進ください」

男はまた扉の向こうへと消えていった。

残された僕は、もう一人残された少女のために、テレパシーを覚えようと頑張るのだった。

それからと、うも、僕の格闘は続いた。「養成キット」に付属の本と、装置（頭に乗せて使うもので、精密な機械のよう。だが案外軽くできている）を使いつつ、テレパシーしようと悪戦苦闘していた。だが、マニュアルどうり試してみるもの、一向にできやしない。

「せめて中学校でそいつ授業があつたらなあ・・・なんてな・・・」

今日のところはあきらめるかなあ・・・はあ・・・僕自身が電腦化された人間だったら出来るかもしないのになあ・・・つてアニメの観すぎか。

仕方なく、途方に暮れてる僕。

ふと、少女をまじまじと見てみる。装置に触れないように、その頬に触れてみた。その肌は白く、冷たい。何ともいたたまれない気持ちになつた。

それからまた食事が来て、僕だけがそれを食べた。その後、執事？に連れられ、入浴を許された（着替えまで用意してもらつた）。その間、少女をかかりつけの医者とか、看護士とか、メイドとかが検査とかいろいろしていたようだ。

それらが済むと、また部屋に戻つた。窓の外はすっかり夜になつてゐる（ちなみに昼間窓の外を見ると、庭園が広がつてゐる）。僕は何となくなぜか部屋にあるピアノの前に腰を下ろした。

「鍵もかかってないし、ちょっと弾いてみてもいいよな・・・。」

蓋を開けて、軽く弾いてみた。調律もちゃんとこなれてこないがつだ。

「では、1曲……」

薄明かりの部屋で、僕はピアノを奏でる。曲は、ラヴェルの「亡き王女のためのパヴァーヌ」だ……。何とも切ない旋律が、静かな部屋の中に満ちていく。

そうして曲を弾き終わった。

「次は亡き王女のためのセプ ットでも弾くかあ？」ここは屋敷だしな」と、冗談まじりに何となく、少女の方を見る。

少女は泣いていた。

「なつ」

僕の弾いたピアノに反応したといふのか……？

僕はピアノの椅子から立ち、少女の頬を伝う涙を拭つた。

「（助けて……）」

彼女の声がまた聞こえた気がした。

この世界に私はいない。

だから、世界がどうなるとも、私には関係ない。

世界に見捨てられた私。

どうして?

どうして世界は私を見捨てたの?

わからない。

悲しい。としても。

こんな私を救ってよ。誰か。お願い。

田覚めると、僕はまだ屋敷だった。田の前で少女がベッドに横たわ

・

・

・

つていてる。昨日はあの後、気がついたら壁にもたれていて、そのまま眠つてしまつたらしい。僕は立ち上がり、大きく体を伸ばした。

そして少女に向けていつ言った。

「おはよっ」

彼女は相変わらず、大人しく眠つたままで、返事はなかつたけれど。

「おはようござんな」

「…？」

少女の寝顔をのぞき込んでみると、こきなりタキシード男がやつて來た。

「おや、何かお嬢様の顔に付いてましたか？」

「…いや、そんなことはない」

「ふむ。わかつてていると思いますが、お嬢様にいかがわしいといきました場合…・・・」の私、ただじやあおきませんよ?」

「うつ・・・」じつは真剣だ。

「ああ・・・そんな」と、わかつてゐるが、俺も一応、紳士だからな

「ふむ。まあ、『注意ください』ね。といひで、ひとつずつ得られましたか、例のものは?」

たぶん、テレパシーのことであります。

「……そ、それは……」

「ふう……まあ、そんなに急かすつもりもありませんが、あなた
の面倒を見るのも、タダではございませんので、できれば、お早め
にお願いしますね」

「ああ……やうだよな。わ、わかった」

「それに」

男は“お嬢様”をチラと見る。

「……」とこゝでは、一刻も早くお嬢様を「助けて」もらいたいので

そつ話す男の顔は、じにか哀しみに満ちた色をしていた。

「ああ……。じにじも早く国に帰りたいからな。努力はするよ。」

そつこゝと駄はにじにじと笑った（不気味だ……）。

「とにかく、ずっと気になっていたが、あんたはあの少女の何なん
だ？」

「ふふ……それは、そのうちわかりますよ」

ぐぬぬ……。つたぐ、じこつは本当に、じにじの質問に答えられないや
つだ。

「……そつか。まあ、こゝにどせ」

「ふふ。では、頑張つてくれださい」

そう言い残し、男はまた扉の向こうへと去つていった。

ふう、いなくなつたか。どうも、あの男は苦手なんだよな・・・。この質問には答えないくせに、歯に衣着せぬやつ・・・。正体も謎だし、とことんわからなこやつだ・・・。

まあ、いやつのことはどうでもいい。とにかく僕はテレパシーを覚えて、目の前の少女を救い、せつせと日本に帰るのだ！

なにはともあれ、まずはきちんと「養成キット」の使い方を覚えないと、話は始まらない。僕は真剣に付属のガイドブックを読み込む。（にしても、このガイド・・・翻訳版だからか、すこく読みづらいぞ。）

：

：

それから、何時間たつただろうか。ようやく、僕は「養成キット」

の使い方を理解した（気がする）。

要するにあれば。装置の電源が入っていないまま、習得しようと必死になつてゐたわけだ・・・ハツハツハ。

「……早く気づけよ、僕。」

そして、僕は装置の電源を入れ、マニュアル通りにやってみる。

「スイツチオン！！！」

その瞬間！

לְלָדָןְךָ נָדָעַתָּה בְּרִיתְךָ

あ、頭にとりつけた装置から……」、高圧電流がつづく。

で、電源を・・・OFFに・・・し、しないと・・・

だが、無情にも電源を切ることが出来ず、装置から流れてくれる高压電流のおかげで、僕は意識を失うことになった。

・ び び び び び び

(その後も電流は流れ続けた・・・のだろう)

……いや、でもちやんと息が出来る。でも、確かに水の中ここらのようないい感じだらう。海の中？
……

あれ、僕はいったいどうしたんだっけ。

……そうだ、あの「養成キット」の装置で感電して……。

ああ……。

こいつしている間にも、僕は水ではない透明な水のよつなかの水中へ落ちていく。

僕は、死んだのだろうか？

日本にいる家族は、今頃、僕のことを心配しているだらうな。

母さん、父さん、そして姉さん。僕はもう駄目かもしません。先に逝くことを、どうか、お許しください……。

僕は田をつぶつた。ああ、このまま深い水（たぶん水）の奥深くへと落ちて死ぬんだろう。

……

：

だが、どんなに深く落ちようと、呼吸が出来るため、僕が死ぬことは無かった。つていうか、ここは天国か何かで、もう僕は死んだ後だつたりして・・・ははは・・。

気が付くと、水でない何かの底へと僕はたどり着いたようだ。これ以上、もう落ちることはない（と思つ）。

それにもしても、驚くほど静かだ。そして生き物や水草なども見あたらない。あるのは水、岩、そして僕だけだ・・・

・・・と思つて周囲を見渡してみたら、少し遠くの方に人影？を見つけた。僕は思いきつて、その方へと泳いでいく。

（誰か居るのか？・・・）

僕はその人影の近くまでたどり着くと同時に、言葉を失つた。

それは、あの屋敷に住む、僕が助けるべき少女そのものだつたからだ。

いや、本人がどうかはわからない。だけど、膝を抱くようにして座っているその少女は、僕が目にしていたあの少女とそっくりなのだ。服装や髪型、体格など、つうつうである。

(おーい)

僕は彼女に声をかけようとした。しかし、(たぶん)水中なので、声が届かない。

しかたなく、彼女の肩に触れようとした。

(！？)

その時、僕は気が付いてしまった。少女の四肢が鎖で首に繋がっていることに。おそらく、彼女はこの場所から、動くことができないでいる。

そこで僕の気配に気が付いたのか、彼女は顔を上げ、こちらを向いた。目を見開いた彼女の素顔を、僕は初めて見た。

(な・・・に・・?)

唇の動きから、彼女がそう言つたのがわかつた。

僕は言つた。

(君を助けに来た)

(本・・当・・に?)

半信半疑な少女の表情。

(うん、本当!)

僕がそう返すと、彼女はにっこり笑った。それが本当のまぶしくて・
・まるで・・・彼女から光が放たれたように光輝いて見えた。

そのまま光が一面に広がつていって・・・

・
・
・

「はっ」

「・・・田を覚ましましたか」

タキシード男・・・それにメイドさんも・・・あれ、やつをまで僕は、「彼女」と呟いていた・・・のに・・・。

「びっくりしましたよーお食事をお持ちしたら、倒れていらしたから・・・」

メイドが本当に驚きを隠せないよひひひひ。

「大丈夫ですか。しばらく気絶していたようですが」

「・・・ああ、たぶん」
体が動くか試してみるが、何ともないようだ。

「」の家政婦に呼ばれて、来てみたら、あなたが「テレビシー
養成キット」の装置をつけたまま倒れていきました。どうやら、感電
のようでしたね。高圧電流が装置から流れていきました。当時の状況
を覚えてこますか?」

そつと言えば、そつだつた。

「・・・どうやら装置の使い方を間違えたようですね。きちんと説
明書きを読んで使ってくれないと、困りますよ」

「ああ、済まない。迷惑をかけた」

「まあ、何はともあれ、あなたもお嬢様もいじ無事で一安心です、

「ああ・・・」

そうだ、そう言えば少女はびつなったのだろう。僕はチラッと彼女

の方を見てみる。

少女はそれまでと同じように、人工装置に包まれながら、ベッドに寝ていた。

その後、少女の掛かり付けの医者に僕も見てもらつたが、やはり何ともなかつたらしい（よかつた・・・）。

食事などを済ませたら、夜になつていた。

ふと先の出来事を思い返してみる。

僕が見た、あの光景はなんだつたのだろう。

水中のような世界に存在していた少女。

見た限り、今ここで植物状態となり眠っている少女とそっくりだつた。というか、同一人物だろう。

僕はその彼女に約束をしてしまつた。君を助ける、と。

「君を助ける」

今度は眠っている彼女に向けて、僕はつぶやいた。

なんとしても助けたい。さつき君が見せたあの笑顔に、僕は恋をし

てしまったのだから。

私はここにいない。

ここにいるのは、私でない抜け殻。

私が見る景色。

それは、荒れ果てた海の底。

一面に広がる無。

私の四肢は鎖で繋がれ、動けない。

神様がいるのだとしたら、

どうして私にこんな絶望を味わわせるのだろう。

孤独、きっとそれが私の人生のテーマだ。

でも・・・

さつきた彼はいったい誰なのだろう。

彼は私を助けるって言つてくれた・・・。

「助けて・・・お願ひ」

そして、私はまた膝を抱えて、ただ時が過ぎるのを待つ。

彼が来ることを祈りながら・・・。

・・・

・・・

・

翌日。養成キットによる、「臨死体験」を経験した僕の元にて、来客が訪れた。

「改めましてこんにちは。私、この屋敷の執事、でござります。何度かお目にかかつたかと思いますが、この度、あなた様の教育係に任命されました。これからどうぞ、よろしくお願ひします」

「は、はあ。ど、どうも」

ぽかーんとする僕。

「坊や一人では「テレパシー」を習得するのが、難しいのではない
か、と私も一同、非常に危惧しております

「は、はあ・・・

「ほ、坊やって僕のことだよな?

「そこで私が、キットの使い方などを逐一教えます。ええ、安心してください。一緒に、楽しく、テレパシーをマスターしましょうねえ」

そういうと執事は一步踏み寄り、思い切り僕の手を握ってきた。

「え、ええ・・・よろしく」

「あいあい、この執事こんなキャラだつたか?そして、なんか妙に嬉しそうなのは、気のせいだらうか・・・。

「(小声で)・・・あ・・・いいわ・・・坊やショタに教育指導とか・・・夢のようだわあ・・・」

「え、何か言いました?」

「・・・うううん、な、なんでもござれこませんよ。せせ、せせは・・・」

思いつ切り怪しい顔をされてますよね。

・・・いつして、僕と執事のワンシーマンレッスンが始まった。

執事が言つには、いきなり装置をつけてない人間(つまり少女)と

の交信は、素人には難しいとのことだ。

「なので、まずは練習がてら私とテレパシーし合いましょう 私も坊やと同じ装置を使いますので、これなら結構簡単に交信し合つことができるんじゃないと思いますよ」

と言つて、執事は頭に僕が使つてゐるのと同じ装置を着けた（ちなみに細かい設定などは全部彼任せである）。

「いいですか、坊や。テレパシーを相手にうまく伝えるにはとにかく「愛」が大切なんです。相手を思いやる気持ち、それでもって伝えたい言葉を包み込む。そして相手のことを思い浮かべ、それを念じることが必要なんです」

「は、はひ・・・

愛だなんだとよく力説できるなあ、この人・・・。聞いていたりつちが照れてしまう。

「（小声で）ああ・・・愛だんだと聞いたとたんに、ちょっと照れてるわあ・・・うつわー、マジ萌え！萌え！萌え！

「え、何か言いました？」

「・・・い、いいえ、な、なんでもござこませんよ。はは、ははは・・・

「

それから、お互の装置を起動させた。精神を統一し、相手に伝えたい言葉を頭の中で念じる。

「・・・」

「・・・」

だが、執事が思つやうだの處だの處で伝えたこと細かい言葉が
思い浮かばない。

「・・・」

チラリ。

・・田を黙つて集中していた執事が今、一瞬たりとも見た。う
ぐ・・・。よ、余計気が散るつばかりよ。

いやいや。

・・・なんかあこいつひつを見たままにやじつてゐるんですけど。
やうやうのとや。

「ふ〜〜〜」

「（ああ〜〜こ〜わあ。。坊や最高〜〜萌え〜〜萌え〜〜キヨン〜〜）」
執事のからのトレッパー

「いや〜〜今アンタの氣色悪い声が交信された気がしたんだが・・

「いや〜〜真面目なこと何でもお聞きませよ〜〜」

「

「え、え、えーあつははー聞こえちゃいましたか。はつはつはー」

「ま、ま、ま、じ、ね、え、よ、も、う、一、何、考、え、て、ん、だ、よ、一、一、」

「（ああ・・・怒る顔も、す」「キューートだわあ・・・）」 テレ
パシー

「うつ！ また来た！」

このときから僕は、執事がこの手の性癖の持ち主であると認識し、彼と居るときは常に身の危険を感じる羽目になった。

•
•
•

2

その後も、執事からの交信内容に戸惑いながらも、練習を重ねた。その結果、装置を着けた者とであれば、僕も多少はテレパシーを送ることができるようになつていった。

そして夕飯の時間。

この日の午後メイドが親切に食事を運んでくれた。

だが、いつもと違つてがひとつ。。。

「なんで、執事も一緒になんだよー。」

「ええ～いいじやありませんか。一人で食べる食事つけておこしくな
いでしょ。」

そりやそつかもしれないけど、なんどよつこよつてシカタコソン野郎あんた
と一緒に食わなきゃいかんのだ。。

「・・まあ、いこよ。でも、今日だけだぞ。」

「いや～、ありがと。わこます

結局、執事と僕とで夕食を食べた。

「つかぬことを聞いてもいいですか、坊や」

「うへ、急に改まつてなんだよ。気持ち悪い」

「ふふふ。坊やつて聞くといふ、中学生だそつじや ないですかあ

「そ、そつだなび、それがどうしたつてんだよ？」

「中学生つてえ、思春期まつただ中じや ないですかあ。つてこと
は、やつぱつ、好きな子とか、いるんですかねえ？え？・ビツなの、
やつ」とい」

執事は意地悪に、そして鼻息を荒くして睨つめた！

「や、それはだな・・・、え～と、うん、まああれだ。そ、そん
なことビツでもいいじや ないか。あ、今日のこ飯はうまこな～。

練習の後食つ飯は格別だあ～

「ええ～、どうなんですか？ぜひ、教えてくださいよ～。い、い
ないなら私・・・が？・・な、なんて？」

「いや、それだけは遠慮願いたい」

「ひ～ん、ひどいっ！！坊やのいけずう～！！」

僕があの少女を好きなことも、このときちりと彼女を見たことも、
執事には内緒なのだつた。

その日はたぶん水曜日だったかと思う。大学の講義を聞き終わり、友人たちと大学内のカフェでダラダラと話しながら後、私は電車に飛び乗った。何を隠そう、その日は平日にも関わらず、Jリーグの試合があつたのだ。私は、私の敬愛するチームを応援するために、スタジアム行きの電車に乗つた。右手には、サッカー雑誌。鞄の中には、大学のテキスト・ノートなどと一緒に、観戦用グッズが入っている。

「やはり、サッカーはスタジアム観戦が一番よねえ・・・」

私はしみじみと思つ。

「いい女には、煙草とスタジアムと、そしてレプリカユニフォームだわね・・・」

まあ、今はまだ着替えてないから、ヒラヒラした私服なんだけど。

そうして、電車を降り、喫煙所に行くと、私は煙草に火を付けた。

「喫煙所がビルの屋上にあるって、どうなのよ・・・」

その後、しばらく煙草を堪能した。それにしても喫煙所なのに、私しかいないわね・・・。屋上なんて来るの、私くらいだからか？

「おつと、いけない。もうこんな時間だ」

ふと時計を見ると、もうすぐ試合が始まる頃だった。私はトイレで

ユニフォームに着替えた後、スタジアムへと向かつた。

・・・

・

「さすがに平日は人が少ないわねえ」

スタジアムを眺めると、普段より観戦者が少なかつた。まあ、このクラブが最近落ち目だつたのも原因かもしれない。去年のJ2降格劇（劇つていうより悲劇）なんて・・・もはや思い出したくもないわ・・・。

おっと、アンセムが始まったわ。周りの人たちと私も立ち上がり、それを歌う。しっかりとゴール裏を盛り上げてなくつちや。

「ちなみに、「えつお姉さん、一人でサッカー観戦かおwww」ってツツコミはなしの方向でお願いね」

つて誰に言つてるんだろう。

試合が開始して、しばらくたつた頃だらうか。不意に私の携帯が鳴つた。

「もう、誰？！人がせっかくスタジアム観戦してるつていう時に・。
・」

相手は母だった。人が多くて動けそうもないの、私はその場で電話に出る。

「あつ、もしも！」

母が話題を切り出す前に、私は断りを入れる。

「もしもし、お母さん？」「めん、私今、観戦に必死なの。とりあえず、試合終わつたらかけ直すね！」「めん！！」ガチャつ。

この時私は、弟があんなことにならうとは、まったく思わなかつた。

その後、試合は終わつた。

「5ー0の大勝よ！おつほつほー見たか、これが我が軍の実力よ！」

はよ、Jリーグがつてくれ・。

勝利の余韻に浸りつつも、満員でギュウギュウな電車に飛び乗つて、家路についた。

「あいつがこんな時間まで遊んでるなんて、俺は思えないなあ。あ

「うーん、どうかしい。あの子、携帯持つてないし、確認できないから・・・」

「どうかで遊んでるんじゃないの？」

「そうなのよ、いつものように私が仕事から帰ってきたら、あの子がいなくって・・・。それで今まで待ってたんだけど、普段なら帰ってくるのに、今日は帰ってきてこないの」

「えっ、あの子がいない？」

・
・
・

「いつは眞面目で、学校が終われば、いつも家にこもるやつな奴じゃないか」

母に代わって、父が自分の意見を囁く。

「うーん、まあ確かにね。あ、そうだ。といひで、置き手紙とかメモか何か残つてないの？「どこかへ行つてきます」みたいな、や」

「それが、残つてないのよ・・・」

母は相当落胆しているようだ。無理もない。

「代わりに残つていたものは、リビングに置かれたこの本くらいか。・」

父が「これだ」と弟の本を差し出す。

「うー、これは・・・!」

「『モテキ～めぞせ、リア充マスター～』・・・って何この本www」

思わず苦笑。

「ああ、ちよつと読ませてもらつたが、あいつもこんな事に興味を持つようになったか、と内心感動したよ・・・。我が子よ、成長したのだな、と」

父はしみじみとしていた。その様子に母も「やつねえ」と回転して、軽く微笑んだ。

本の内容は弟の名誉のためにも、『』には割愛するとして、問題は彼がどこにいるか、ということだ。

あると私はあることに気が付いた。

「もしかして、この本が弟のメッセージそのものなのかもよー?」

「な、なんですかー!」「なんだとうーー!」
いや、そこまで驚かんでも。

「弟はリビングにこれを置いていった。なぜか。それはこの本のタイトルとか中身そのものが、彼からのメッセージに当たるからよー。彼はこの本を置いておくことで、彼の居場所とか行き先を私たちに暗示しよつとしたんだわ!」

どう、この名推理。

「や、そつか・・・そつこひとか

両親は妙に納得してくれてこる。

「ど、言うことは、それを読み説けば、あいつの居場所がわかるかもしけない、ということだな?」

父が少し興奮して聞いてくる。

「ええ、そつよーそつこひないわー!」

いや、本当はそんなに自信を持つて言えることじやないんだけどさ。

「「モテ学～めざせ、リア充マスター～」か・・・、そういうえば、このぐだり・・・どこかで見たような・・・」

「はっ！――」

一同、気づいてしまった。それがポケンの主題歌のタイトルと酷似してることに。そうか、それのパロディなのか、この題は。

「ど、なると・・・、奴は「リア充」を目指して、旅に出たということか・・・？」

父が真剣な眼差しで推理する。

「そうよ、きっとそうだわ！」

今度は父が見せた名推理に、私と母は思わず感嘆した。

「そ、うか・・・、あいつも相当「リアルの充実」を欲していたのだな・・・。少年よ、大志を抱け、とは言うが、ここはあいつの意志を尊重して、しばらく放つておいてやるうか・・・」

しみじみとした様子で我が子の気持ちを汲んだ父は、私たちにそう問いかけた。

「ええ、そうしましょう」「そ、うだね」

特に反論もなかつたので、私たちはそれに賛同した。

「頑張るのだぞ、息子よー」「頑張つて！」

胸が熱くなってしまったのか、両親は泣いていた。どこか遠くにい

つた弟の「活躍」を祈りながら。

「あつはは・・・」それで、良かったのかしら」

その日から今日で何日たつただろうか。一向に弟の消息はつかめない。やっぱり警察に捜索願いを出した方がいいのではないか。

なんだか、ますます弟のことが心配になってきた（いろいろな意味で）。

「・・・あつ、いつか。あーあ、早く次の試合の用にならないかなあ。次は因縁の対決よー！」で勝たずして、いつ勝つといつの？「行くわよーーー！」

そして、私はブランドで煙草をふかす。

いい女には、煙草とスタジアムと、そしてレプリカコニーフォーム・・・だわね。

「頑張るのだぞ、弟よー！」

そして私は大学へと向かった。

「熱い、熱いよお・・・うわ～ん。うしが燃えてるよお・・・。パ
パ、ママあ・・」

燃えさかる炎。それに包まれる私の家。その光景が怖くて、幼い私はその場に立ち尽くし、泣きわめいた。

だが、いくら泣きわめいても、誰も来てくれない。パパもママも。その間にも、火の手はどんどん私の周りに迫ってくる。幼心に「もう駄目か」という感情が宿る。

すると、その時だった。

「誰かいるかあー！ー！ー！いるなら、返事をしろよー！ー！ー！」

近所の住人が何かが、勇敢にも火の手のあかる我が家に入り、助けに来てくれた。

「うわーん！ うわーん！」

「そつちか！待つてろ、今助けてやるからな！」

そして、私は見知らぬ命の恩人につかまれ……

抱きかかえられながら、火の粉の中を・・進んで・・

外へと・・・

・・・

・・

「はつ

目が覚めると、そこはいつも屋敷。

「夢か・・・

幼い頃の私、そして家族を襲った火事の夢。忌まわしい記憶・・。忘れないのに、忘れられないうえ、今でもこつして時々夢にみる。

「・・・パパ・・・、ママ・・・」

もう、戻らない人々。どうして私だけが・・。

私は記憶に蓋を閉じるかのように、洗面台で顔を洗い、気持ちを切り替える。暗い過去のことは、もう忘れたつもりだ。

「・・・もう何があつても、私は挫けない・・・」

・・・

あれから毎日、執事との「ワンツーマンレッスン」は続いている。

部屋にはホワイトボードや机が導入されるまでに至った。この前の
ような実践練習も行われるが、今ではこうして執事による「テレパ
シー養成講座」が講義形式で実施されている（もちろん、聞くのは
僕だ）。

何でもこの執事は、学生時代は教員志望だったらしく、教員免許状
まで持つていてるらしい。意外にも高学歴であり、教育に對して情熱
的なだった。

「僕は単なる変態執事だと思つてたんだけどな・・・

「坊や、何かもしたか？」

「いや、何にも。はは

「そうですか。では、授業に集中してくださいね」

そして変態執事は、教鞭をふるうのだった。その姿は結構、様に
なっている。

「ではそろそろ休憩しましょうか」

「ああ・・・」

ふう・・・やつと終わつたつて感じだ。タキシード男が四つほど、トレパシー習得も楽ではないなあ。つていうか、中学生に理解できる内容なのか、これ？・・・まあ、命がかかってるから、文句は言えないよな・・・、気長にいくしかないな・・・。

「坊や、何をぼーっとしているのですか。食事にしましょうよ」

結局こいつとの食事も続いている・・・。

「ねえ、坊やつてば！・・・はつ、さては例の好きな人のことを考えているのですね！？し思春期の憂鬱という奴ですか？も、もしよろしければ私が相談に乗りますよ？」

「あ、ああ、そうだな」

「えつ、いいんですか？で、誰なんですか、お相手は？も、もしかして・・・あのタキシードの・・・」

「ちげーよー」「そうだな飯にしよつ」って意味だよー・それと、（相手は）タキシードじやねえからー！」

「なんだ・・・ですか。でもその反応からみるに、好きな人、本当にいるんですねえ・・・クスクス」

本当にこつせゴシップネタが好きだよな・・。

その後、こつもの「」とくメイドが一人分の食事を運んできてくれた。

それを食べながら、また会話に花を咲かせる。

「なあ、質問があるんだけど、いいか?」

「はい、なんでしょう。スリーサイズとか?」

「ちばえよーー誰もあんたの体のことなんか興味ないからーー」

「やうですかあーー私は坊やの体のこと、興味あるんですけどねえーーじゅるりーー」

「、怖いからそんな目で見ないでください。」

「・・えつと、だな。その、執事さんよ。あんた、あんなに授業上手いのに、なんで教師にならなかつたんだ?資格は持つてるんだろ?ぶつちやけ、うちの中学の教師より、授業うまいと思つんだが・・」

「

執事はまさか僕がそれを褒めるとは思つていなかつたらしく、「えつ!きやつ、うれしいー」とか言つてはしゃぎだした。

「・・いいから、早よ質問に答へんかい!」

は

「えつへへ～。ええとですね、その、実を言いますと、私は教員には向いてないと思つんですよ」

「はあ？ そんなことないだろ」

「いやいや、それがですね・・・私も一応、教員として働いていた時期があるんです。大学を出たその年に、少しだけ」

「わうなんか？ なんでやめちまつたんだ？」

「ふふ・・・それがですね・・・私が働いていたのって、小学校なんですね。で、ほら、私ってこいついう性癖じやないですか？それが災いしまして・・・その・・・男子児童に手を出したら、懲戒免職されてしまいました！」

「ぶふーー！」

「わつ、汚い！」

「す、すまん・・・立ち入つたことを聞いてしまつて・・・」

「いえいえ、いいんですよ」

「どうやら僕は「地雷」を踏んでしまつたらしい。触れない方がよかつたな・・・。

「それに、私、こうして坊やに授業をしているだけで幸せです。ああ執事になつて、よかつたあ～」

「・・・・・

やつぱりこいつは筋金入りのショタコン野郎だな、と僕は思つのだった。

そんなこんなで食事が终わり、メイドがそれを片づけた。彼女と入れ替わりに、タキシード男が入ってきて、「テレパシー習得は進んでますか?」と状況を确认しに来た。当たり障りのない返事を送ると、「そうですか。引き続き頑張つてください」と言い残し、男は去つていった。

(こちいち確認に来るなんて、『苦勞なやつだ。』)

「ふう。私も坊やの教師である以上、责任が重いですねえ。彼も相当坊やに期待しているようですがし・・・

「やうなのか?まあ。期待とかどうでもいいけどな、僕は

「・・・え、何それ。彼に対するシンデレ表現ですか?」

「んなわけあるか!」

「・・・ふう、よかつた・・・

ヤキモチかよ。

「・・・あ、そうだ。もつ一つ質問してもいいか?」

「なんですか？」

「あのタキシード男のことなんだけだ。あいつって一体何者なんだ？」「お嬢様」という関係しているんだ？」

そう聞くと、変態教師は急に引き締まった表情になり、「本当に聞きたいのですか？」と聞いかけた。

「ああ」

緊張の面もちで、僕は言った。

「・・・私が言つたって言わないでくださいね？それと、聞いてあまり楽しくなる話ではありませんよ」

やつぱり、執事はタキシード男について知りたいことを語り始めた。

私が生まれた家はとかく貧乏で、それでいて狭いものだつた。

兄弟は7人いた。もしかしたら、それ以上いたかもしない。父親が女ぐせが悪く、とつかえひつかえ愛人を作つていていたせいだ。腹違いの兄弟たちで、狭い家はあふれていた。

私の母親は、小さな居酒屋の女将だつた。ある日飲みに来た父親と恋仲になり、気づいたら、私をはらんでいたらしい。だが、親父の女癖の悪さに嫌気が差し、私が小さい頃に違う男とどこかへ行つてしまつた（これは後で父親に聞かされた話だ）。

私の母親がそうであつたように、父親の元を去つていつた「母親」たち。家は、そんな「母親」たちから生まれた腹違いの兄弟であふれていたのだつた。

父親は飲んだくれであつた。夜な夜な別の女を連れてきては、狭い家の中で宴会を催した。私たち兄弟に酒を注がせたり、調達させたりした。時として、酔つて私たちに暴力をふるうことすらあつた。とにかく最低な父親だつたと思う。

だが、そんな最低な父親でさえ、私たち兄弟には居てくれた方が良かったのだ。

ある日、父親が逮捕された。女がらみで暴力沙汰になり、相手の男を過つて殺してしまつたらしい。家には、父親しか保護者となるべき人間がいなかつたため、私たち兄弟を養ってくれる人がいなくなつてしまつた。

その結果、私たち兄弟は、個別にそれぞれの「引き取り先」へと引き取られることになった。私は、遠い親戚の家へ。その日を境に、兄弟はバラバラになり、疎遠となつた。今彼らがどうしているのか、それは私にはわからない。

親戚の家に移つてからは、幸せな日々が続いた。食事や着替えもきちんと用意してもらえたばかりか、学校にだつて行かせてもらえた。義母や義父は私を可愛がってくれ、私もそれに甘えた。彼らの間に他の子どもがいなかつたのが、少し残念だつたが、私には申し分のない環境だつた。

そんな幸せな日々が何日も続いたが、ある日、転機が訪れた。家が火事になつたのだ。その結果、近所の住人に救われた私だけが生き残り、義母^{ママ}や義父^{パパ}はこの火事が原因で帰らぬ人となつた。

こうして、私はまたひとりぼっちになつた。

あの火事から何日も経たないうちに、私はとある児童養護施設に入ることになった。義父の叔父の知り合いがその施設の施設長だったから、入所はスムーズにいった。それまでは、私を助けてくれた近所のおじさんに世話をもらっていたが、さすがにいつまでも世話になるわけにもいかなかつた（おじさんの家族が私が早急に出ていくことを望んでいたらしい）。

おじさんの元を離れる際、彼は私を強く抱いた。そして涙ながらに「おじさん、おじさん」と泣いた。「強く生きろよ」と。

「うん」

おじさんの温もりの中で私も泣いた。

そうして、養護施設での生活が始まった。

施設での生活に関わる資金は、大人になつてから返すとこう条件で、義父の叔父に出してもらつことになつた。

施設には、親を失つた子どもや、親に捨てられた子どもが住んでいた。住むと言つても、何もかも自由というわけではなく、一般的な学校のように、時間割が組まれ、基本的にそれに沿つて時間が動いていた。勉強や運動、掃除や料理などを他の子どもと一緒にやつた。他の子どもと一緒に生活していく中で、私は次第に火事で家族を亡くした悲しみから立ち直つていった。

やつして施設での生活にも慣れてきたある日の出来事・・・。

朝から夕方までは、時間割に沿つて皆が行動を共にするが、それが過ぎれば、それぞれの自由時間となる。私は誰もいない部屋で本を読んでいた。するとどこからか、楽器を演奏する音が聞こえてきた。誰だらう。私は何となく気になつて音のする部屋を覗いてみた。

その部屋では、女の子がバイオリンを弾いていた。その可憐な姿、美しい音色に私は息を飲んだ。

「きれいだ・・・」

私は思わず、そう口にじていた。

「一・?」

すると、私の存在に気がついたのか、彼女がこちらを見た。

そして演奏を止め、「ここにちは」と言つて微笑んだ。

「ここにちは。勝手に聞いていい「めんなさい」。本を読んだったら、音が聞こえてきたものだから、誰かなと思つて見に来たんです。それがあまりにも上手だったので・・・」

「ふふ、いいのよ。褒めてくださつてありがとうございます。私こそ、読書の邪魔しちゃつて「めんなさいね」

「邪魔だなんて、そんな。むしろ、こんな美しい演奏を聞けたこと

に感謝したいくらいです。それは、なんといつ曲なのですか?」「

「ふふ。」れ?」れはね、チャイコフスキーのバイオリン協奏曲。綺麗な曲でしょ。でも、すぐ難しいんだ。いつかオーケストラとやりたいて思つて、練習してゐる」

「わつなんですか。すこですね。。。あの、お願ひなんですが、わつ一度聞かせてもらえませんか?」

「え、うん、いよ。まだ練習中でうまく弾けてないから恥ずかしいけど・・・」

そつ言につつも、彼女は再びバイオリンを構え、その曲を弾き始めた。やつぱり、綺麗だ・・。

「ふう、どうだつた?私、うまく弾けてるかな?」

「はい、とてもお上手です。うつとり聞き忘れてしましましたよ

「ふふ・・。あなたはお世辞がお上手ね」

それから、しばらぐの時間、彼女とお互にのこについて軽く話した。

「また、聞きたくてもいいでしょうか?」
私は聞いた。

「うん、いいわよ。誰かに聞いてもらつた方が、練習にもなるしね

「ありがとうございました。IJの施設での楽しみが増えました」

「ふふ。やうやくでもいいんだ、私もつれしこわ」

これが私と「お嬢様」との出会いだつた。

それからとくにいつもの、施設での生活の中で、私は、彼女、いや、「お嬢様」と過ごす時間が増えていった。勉強の時間、料理の時間、掃除の時間、そして放課後。何かにつけて、私はお嬢様に近づこうとした。しまいには、お嬢様にバイオリンを教えてもらったり、私のおすすめの本を貸したり・・・。

そうして一日一日と時は流れ、気がつけば、私たちはそれなりの年頃になっていた。

私はこれまでの人生の中で、感じたことのない感情をお嬢様に抱くようになっていた。人はそれを「恋」と呼ぶのかもしれない。それも「初恋」と。

ある時、お嬢様に対する私のこの感情をどう整理したらいいかわからなくなり、施設で働く女性職員に相談したことがある。その施設職員はこう言った。

「そんなに気になるのなら、デートに誘つてみたら? それで本当に一緒にいたいと思えるのなら、告白してみたら?」と。

「デートに告白・・・。それまで経験したことのない行動。そういう行動が「恋愛」には必要であるということは、それまで生きてきた中で必ずと学習してきたつもりだが、いざそれを実行しようとなると、なかなか踏ん切りがつかないものだった。「どのように切り出せばいいものか・・・」私はひたすら悩んだ。

だが、いつまでもウジウジと悩んでいるわけにもいかない。私とて、もう一人前の男なのだ。このくらいの行動を切り出せなくてどうする。そう思つて、とうとう私はお嬢様をデートに誘つことにした。

「決戦」の日……いつものように、放課後、お嬢様のところにやつてきた私。お嬢様は、今日はバイオリンではなく、ピアノを弾いていた（ここに来る前に、どちらも練つていたらしく）。

「今日は何を弾いてるのですか？」

「何事もないよ、私は聞いた。

「今日？今日はね、シベリウスの「もみ樅の木」という曲よ。これを弾くと、ちよつぱり切なくなるけど、結構好きな曲なの」

「そうなのですか。たしかに、哀愁が漂つていますね」

そういじょ、と云つて、お嬢様は笑みを浮かべた。

それからじょじょの間、彼女が弾くピアノの音色に酔いしれていた。

お嬢様は真剣に練習なさつている。ああ……あの話題を切り出さなくては。でも、そうすることで彼女の練習の邪魔をしてしまわないだろうか。いやいや、いかん。そんなこと気にしていては、いつ

まで経つても誘えないではないか。今日こそ誘わなくては……。

「あのう、突然ですが、オーケストラの生演奏つて聞いたことがありますか？」

「え、どうしたの急に？」「へん、あるつていえはあるけど、ここに来る前だから、聞いたのはうんと小さいとき。だからもう覚えてないなあ」

よし来た！

「そうでしたか。あの、もしよかつたら、チケットがあるので、一緒に聞きにいきませんか？」

そういつて、私は泣けなしの金であらかじめ購入しておいたクラシックコンサートのチケットを見せる（もちろん2枚）。

「え、うそー？ 本当に！？」

そういつて、彼女はピアノ椅子から立ち、食に入るよつてチケットを見つめた。

「うわっ、本物だ！ しかも、このオーケストラ、あの有名な……いい、いいのかな？ 私なんかがご一緒にさせてもらつても……」

「え・ええ・・・・。わ、私はあなたと一緒に聞きたいで……」

そう言つたとき、私はまともに彼女の顔をみることができなかつた。何せ、こんなクサイ台詞、吐いたことがなかつたから。

「

「本当にうれしい。じゃあ、約束ね」

「はい」

こうして、私は何とかお嬢様を「アート」に誘うことに成功したのだった。

（お嬢様がオーケストラの演奏を生で何回か聞いたことがあったな
うば、どうしていたのだろう。私は・・・）

その日は雨が降っていた。私は、お嬢様と一緒に施設を出て、駅に至るバスへと搭乗した。何を隠そう、今日はお嬢様との「初デート」。緊張の色は隠せない。一方でお嬢様と来たら、「今日朝タロット占いをしてみたのだけれど、あたらしく出会いがあるでしょう、つてこう結果が出たわ！」などと他愛もないことを話す（あ、新しい出会いだと……！？）。

しばらくして、駅へと到着した。それから、コンサートホールのある街まで電車に揺られた。電車は意外と空いていて、私たちは難なく座ることができた。だが、何駅か通過するに連れて、だんだんと混んできたため、すぐに座席は埋まってしまった。

そのおかげでお嬢様と密着して座ることとなつた……。どうも我する私。だが、相変わらずお嬢様はそんなことは気にもせず、血液型占いがどうのこうのといった他愛もない話をされてい。私はうまい具合に話を合わせていた。

そんなこんなで、しばらく電車に揺られていると、田的の駅に着いてしまつた。白いワンピース姿のお嬢様は、はしゃいだ様子で、「さあ行きましょう」と言つて、駆けていった。

「駅構内あんまりはしゃぐと危ないですよーー！」

私はその背に叫んだ。すると、お嬢様は「わっ！」と叫んだかと思うと、次の瞬間には転んでしまつた。私はすぐさま駆けつけた。

「あいたた・・

「ほり、言わん」ひちやありますん」

「い、いめんね。私ったら、つこ・・。こんな外出するのって、久しぶりだから、うれしくて」

「コンサートは逃げませんから、焦らなくつても大丈夫ですよ

「ええ、やうね」彼女は笑つた。

「いめん、ちよつと起きあがれそうこないわ、手を貸してくれるかしらへ。」

「え、ええ・・」私はとつそに手を差し出した。

「あつがとつ」

そう言つて、お嬢様は私の手を取り、立ち上がつた。

「どうしたの?」

「いえ、何でもありません。はは・・

ひょんな事で、お嬢様と手をつないでしまつて、私はまたどぎもがもしてしまつたのでした。

それから、コンサートまでまだ時間があり、お腹も空いたといふことで、店に入つて食事を取ることにした。お嬢様と向き合つての食

事・・・私はまたどぎまぎした。ふいに「今、私たちは他人から見たら、恋人同士に見えるだらうな」などと思つてしまい、それがまた余計私を緊張させた（私はこんなにも気が小さいのだ）。

一方でお嬢様と来たら、久々に外出できた喜びからか、非常に饒舌になつており、私とは対照的だ。さきほどから、「ねえ、プラトンのいう、イデアってあると思う?」などと、話している。私は頑張つて、うまく会話を合わせていた。

そんなこんなで、いよいよコンサートの時間となつた。私たちは、入り口でチケットを見せ、難なく会場へと入つた。座席を見つけ、そこに座る（これまた隣同士）。今度はどぎまぎしないようにしないとな、いや隣合わせで座つている時点でそれは無理だな、などと私は思った。お嬢様は熱心にパンフレットに目を通している。

それから程なくして、オーケストラが入場してきた。私たち観客はそれを拍手で迎い入れる。いよいよ演奏が始まる！

コンサートの曲目は、幻想序曲「ロミニオとジュリエット」、弦楽セレナーデ、そして交響曲第6番「悲愴」で、オール・チャイコフスキーキー・プログラムだ。チャイコフスキーよりお嬢様にぴったりな演奏会となつていた（だからこそ彼女を招待したという事もある）。

初めて聞く、オーケストラの生演奏。それを私の好きな人と聞けるなんて・・・私としては、もうそれだけで感無量だった。

演奏中、ふと彼女の方を見ると、彼女は泣いていた。

「綺麗ね。とっても・・・」

・・・

・

そうして、演奏会は拍手喝采のうちに終わった。

帰り道。

私は、お嬢様に言ひべくして考えてきた言葉を伝えよとい、タイミングを見計らつて。だが、今日でいいのか？まだ早くないか？言つにしても、きちんとした場所がいいんじゃないのか？などといふ疑念が頭の中をよぎり、私はそれを言つことが出来ないでいた。

すると、お嬢様が、

「あのね、私、ちょっと今日思ったことがあるんだ

と話を持ちかけた。

お、思つたこと……？まあが、い、告白へこや、そんなことば・
ない・・よ・な・・？

頭ではそんなことを考えて、顔には出れないよう平静を保つて言つた。

「はい、なんでしょ？」

「じ、実はね・・・私・・・」

その彼女の「思い」が、私たち一人の運命を変えることにならうとは、思いもしなかった。

「実はね、わたし・・今日の演奏会、あなたと一緒に来られて本当に良かったと思っているの」

とつやに彼女はさう私に告げた。

え、そ・・それって、まさか・・

告白？！

・・・なわけないよな。まあ待て、待つのだ私。まだ慌てるような時間じゃない。

「コホン。そうですか、それは良かった。誘った私もさう言つていただけて、うれしいですよ」

そう言つて、お互に微笑み合つ。

「でね、私思つたんだけど・・

「ぐく。私の緊張の度合いが最高潮に達する・・。

「私・・・プロの演奏家を手指そつと弾くの」

え、あ、はい？

「普、プロって、バイオリンの？」

期待を裏切られただけでなく、彼女の思いつきに驚きを隠せない私。

「そう。バイオリンの・・・。今日の演奏会を聴いていてね、本当に綺麗だなって思ったんだ。それで、私もあんな風にコンサートホールで弾けたらいいなって、思ったの。うんうん、前々から思ってたけど、今日の演奏会を聴いたことで、やっぱりそうしようって決心がついたわ」

彼女が話している間、その真剣な口調、眼差しに翻弄されていた。

「そうですか・・・、ならば、私にできることはそれを支えること、ですかね」

「えつ？」

「考えてみれば、私はあなたのバイオリンのファンなのがもしされません。あの日、あなたが奏てるバイオリンコンチェルトを聴いて、私はなんて美しいんだろうと思った。そして、それがきっかけで私とあなたは出会ったのです。これは運命的なものだと、私は感じています。ですから、私にぜひお手伝いさせてください。」

「い、いいの？」

「ええ、私がそうしたいのですから」

そう言つて、彼女はにこり笑つて、力強く「ありがとう！」と言つて、私に抱きついた。

「うわっ、あ、雨で濡れますよーー？」

嘘。本当はもうほとんど雨なんて降つていなかつた。私がそう言つたのは、ただの照れ隠しだつた。

「ふふふ、いいのよそんなの」

しばらくして、彼女は私から離れた。

「私があなたの奏でる音に魅了されたよ」と、様々な人を魅了できることいですね」

「そうね。そんな日が、来るといいなあ。あつ、そうだ、私がプロになつたらあなたには私のマネージャーをやつてもらおうかしら」

「マ、マネージャーですか。い、いいですよーおやすいござ用ですー！」

「うふふ、じゃあ決まりね。一緒に頑張りましょーー！」

そう言つて彼女は私に握手を求めた。

「ええ

私はこうして、彼女の付き人となつたのだ。正直に言えれば、このときは彼女が本当にになるとは微塵も思つていなかつた。このと

きの私は、ただ彼女と一緒にいたいといつ目的を果たすために、彼女への協力を願い出たまでだった。

「ふんふん～ふふふふ～ふ～ふふふ～んふふ～ん」

「そ、それはラヴュールの・・・」

「わう、上き王女の為のパヴァーヌ。さつきの演奏会のアンコール曲

「ああ、そういえば。

「とても綺麗な曲ですよね」

「ええ、本当に・・・私、この曲大好き。よく覚えてないんだけど、小さい頃、ピアノでよく演奏した気がするのよね」

「へえ、わうなんですか。じゃあ、今度、私にも聴かせてくださいよ」

「ふふ、いいわよ。帰つたら、早速、聴かせてあげる」

「ええ、でも帰つたら夜遅いですから・・・また明日にでも

「走つて帰ればまだ大丈夫な時間でしょ？行くわよー。」

「わつ」

そう言つと、彼女は私の手を引いて走り出したのだった。変わりはじめる私たちの関係を象徴するかのように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4502x/>

悲痛なテレパシー

2011年12月1日18時48分発行